

『簠簋抄』の説話世界

中野 瑛 介

はじめに

『簠簋抄』は、安倍晴明仮託の陰陽道・暦数書『三国相伝陰陽輶轄簠簋内伝金烏玉兔集』(以下『簠簋内伝』)の注釈書である。成立時期・編者共に未詳だが、内容から中世末期の成立ではないかと考えられている^①。

これまで、『簠簋抄』は、主に安倍晴明の伝説を記した書として知られてきた。冒頭の「三国相伝簠簋金烏玉兔集之由来」(以下〈由来〉)と題された記事には、「金烏玉兔集」即ちこの『簠簋内伝』の伝授を中心とした安倍晴明の一代記が描かれており、説経節・古浄瑠璃『しのだづま』や、浄瑠璃・歌舞伎『芦屋道満大内鑑』の源流にあたると論じられてきた。文学研究の場で『簠簋抄』について論じられる時は、〈由来〉に関する話題が主で、「近世以降の安倍晴明伝説の源流を記した書」というのが、現在の『簠簋抄』の位置づけだといえるだろう。

しかし、〈由来〉は『簠簋抄』という書物の、あくまでも一部分であり、大部分を占める『簠簋内伝』の語注が、『簠簋抄』の〈本篇〉だと言える。また、〈本篇〉にも多くの説話が用いられている。数え方にもよるが、五十程度の説話的記事が含まれており、〈本篇〉だけでも一種の説話集と呼べる程である。

説話研究の観点から『簠簋抄』を考える時、この〈本篇〉の検討は必要だといえる。しかし〈本篇〉に関しては、渡辺守邦による基礎的な研究や、個別の説話を扱った研究がいくつかあるものの、翻刻が公表されていないのが現状である。^②〈由来〉に関しては真下美弥子・山下克明による書き下し及び注^③があるものの、〈本篇〉に関してはそうしたものも無い。

本稿では、『簠簋抄』(〈本篇〉)に含まれる説話的記事を概観し、いくつかを具体的に紹介することで、『簠簋抄』の説話集としての特徴を考える。

一、『簠簋抄』とその説話

まず本稿で扱う資料の書誌を簡単に説明する。

今回用いるのは寛永六年刊菊屋勝太夫版『簠簋抄』である。大本の上・中・下三冊から成り、半丁十二行で、上冊が三十三丁、中冊が五十丁、下冊が二十二丁である。本文はカタカナ交じりの漢文で記される。

『簠簋抄』は、渡辺守邦によって、版本十二種類が報告されており、寛永六年菊屋勝太夫版は、整版としては最も古い版にあたる。⁽⁸⁾この菊屋版以前にも、古活字版で、寛永四年松岡作左衛門版及び、国立国会図書館新城文庫蔵の寛永年間版が存在する。しかし、前者は個人蔵のため筆者未見であり、後者は下冊終丁を欠くなど、一部欠損が見られる。菊屋版は、寛永年間古活字版の覆刻版で、古活字版には無かった句読点、振り仮名や送り仮名が新たに付されている。

先述のとおり『簠簋抄』は、「金烏玉兎集」の三国相伝を記した〈由来〉から始まる。〈由来〉は菊屋版で十五丁オモテまで続くが、これは上冊のおよそ半分にあたる。

上冊後半からは〈本篇〉、すなわち『簠簋内伝』全五巻の語注が記されている。上冊後半には書名及び序文（内題「三国相伝陰陽輶轄簠簋内伝金烏玉兎集註」と、『簠簋内伝』巻第一への注が、中冊には同巻第二及び巻第三への注が収録されている。下冊には同巻第四及び巻第五の注の他、巻末には「千倍日」や、

「門開ノ事」等、『簠簋内伝』には見られない項目の短い記事が並び、最後に二丁半に渡り「五帝龍王戦之事」と題された記事が記されている。詳細は後述するが、この記事は『簠簋内伝』巻第二の冒頭部分に対応したものである。

そして、『簠簋抄』（本篇）に含まれる主だった説話記事を、注の項目ごとに挙げると次のようになる。

『簠簋抄』（本篇）に含まれる主な説話の記事

「」内は私意に要約した説話内容。一つの記事に複数の内容が含まれている場合は／で区切っている。また、*は本稿で個別に取り扱う記事（後述）

上冊

三国相伝陰陽輶轄簠簋内伝金烏玉兎集註（書名、序文への注）

*金烏「三足の鳥」（十六ウ）、玉兎「兎の捨身」（十六ウ）、天文「嚴子陵」（十七オ）、*古備后胤「魚養」（十八オ）、鴛鴦「絵姿女房」（二十四オ）、*蛇毒鬼「蛇毒鬼」（二十五オ）、四衆「四衆」（二十五ウ）、八龍「八大龍王」（二十五ウ）、飛行ノ矢「矢／手綱と猿」（二十七オ）

巻第一（該当なし）

中冊

巻第二

南瞻浮洲「伊弉諾伊弉冉と地主神」（二オ）、十千之事 戊己「恙鬼」（四オ）、十二支 寅「件」（ケン）、あるいは「くだん」（六ウ）、十二支 卯「月の兎と地上の兎」（七ウ）、

十二支 申「山王の馬」(八ウ)、十二客之事「酒の始まり」(九ウ)、帰亡往亡之事「石碎と鉄破の相撲」(十八ウ)、十死一生之事「久命法皇」(十九オ)

卷第三

三宝上吉日 丙寅「舍利弗と長爪梵士」(二十五ウ)、三宝上吉日 壬午「祇園精舎の建立」(二十六ウ)、三宝上吉日 庚寅「悉達太子の出家」(二十七ウ)、三宝上吉日 甲午「女房の熊野詣」(二十八オ)、三宝上吉日 丁酉「阿難と迦葉」(二十八オ)、三宝上吉日 己酉「目連と施鉄鬼/目連の音声」(二十九オ)、三宝中吉日 丙寅「阿闍世王」(三十一オ)、三宝中吉日 丁卯「妙莊嚴王」(三十二オ)、三宝中吉日 辛未「釈提桓因の三橋」(三十三オ)、三宝中吉日 庚辰「曼荼訶女」(三十三オ)、三宝下吉日 庚午「普明王と班足王/頂生王」(三十四オ)、三宝下吉日 丁丑「雪山童子」(三十六オ)、三宝下吉日 辛巳「大施太子」(三十六ウ)、三宝下吉日 丙午「尸毘大王」(三十七オ)、三宝下吉日 辛亥「鹿野園」(三十八オ)、神上吉日 己巳「辰狐王の三女子」(三十八ウ)、神上吉日 壬申「伊弉諾伊弉冉の国産み」(三十八ウ)、神上吉日 癸酉「素戔鳴の大蛇退治」(三十九オ)、神上吉日 壬午「阿久留王」(四十オ)、神上吉日 甲申「天岩戸」(四十オ)、神中吉日 庚午「神宮后宮の三韓征伐/孝謙天皇と道鏡/弓矢八幡の本地」(四十ウ)、神中吉日 乙酉「大和武尊と草薙劍」(四十三

ウ)、神下吉日 丁丑「渡唐天神」(四十四ウ)

下冊

卷第四(該当なし)

卷第五

同時宿之事「同時宿」(十一ウ)

雑記事(該当なし)

* 五帝龍王戦之事「五帝龍王/宇布絹の鎧」(二十オ)

ここに挙げた記事を見渡すと、『簠簋抄』の説話的記事は、各巻の記事が満遍なく分布しているのではなく、多くの記事が巻第三の三宝吉日及び神吉日に関する記事に集中していることがわかる。これは三宝吉日と神吉日の、吉日としての性格によるものが大きいと言えるだろう。三宝吉日は仏事に、神吉日は神事に良いとされる日であるが、『簠簋内伝』ではその由来を仏伝や日本の神に関する説話に求めている。

例えば、『簠簋内伝』では、癸酉の日が、素戔鳴が八岐大蛇を退治した日であるために神上吉日だと説く。『簠簋抄』では、『簠簋内伝』の簡潔な記述を補足するように、素戔鳴の大蛇退治の説話を詳細に記している。例外的に、三宝上吉日・甲午は『簠簋抄』独自の内容となっているものの、『簠簋抄』三宝吉日及び神吉日の記事は、『簠簋内伝』で言及された説話に沿った内容となっている。『簠簋内伝』自体が説話的な記事を用いているため、その解説・補足である『簠簋抄』において、該当部分に説話が集中するのは自然なことといえるだろう。

『簠簋抄』全体の説話を見渡したところで、次節からは『簠簋抄』(本篇)から取り上げた記事を本文と共に検討していく。

二、金鳥——『法華經直談鈔』との関わり

初めに見るのは、書名「三国相伝陰陽輶轄簠簋内伝金鳥玉珥集」の「金鳥」への注である。

金鳥(上冊十六丁ウラ。句読点、カギ括弧は引用者による。以下同じ)

金鳥ト者、日ノ異名也。其故ヲ尋ニ大唐ニ軒輶皇帝ノ御世ニ日輪七ツ出。皇帝六ッ祭落シ見給ニ、三足ノ鳥有リ。又、五帝ノ時、唐堯ノ御世ニ日六出。堯王ノ臣下ニ羿ト云人五ッ射落。此ノ時モ三足ノカラス有ル故ニ金鳥ト云也。皇帝ノ六ッ祭落シ給モ用也。羿ガ五ッ射落モ用也。二度ナガラ落ハ用ニテ体ハ不レ落ト也。金ト者、堅固ノ義。鳥ト者如レ右。三足ト者、日輪ヲ火ニ取ル故ニ、火三ノ義也。足ト者、地大ニシテ、是レモ堅固ノ義也。

金鳥が日の異名であると説明し、日と鳥にまつわる説話を引いている。大唐・軒輶帝(黄帝)の治世に、日が七つ昇り、軒輶帝が内六つを祭り落したところ、三足の鳥がいた。堯の治世でも、日が六つ昇り、羿が内五つを射落としたが、この時も三足の鳥がいたという。

羿は『左伝』や『山海経』に見える弓の名人で、複数の日を射落とす話は、『淮南子』(10)「本経訓」にある。堯の治世に十の日

が並び出て穀物や草木を焼き、様々な怪異や害獣が現れ民を害した。堯に命じられた羿は十の日を射落とし、怪異や害獣を全て退治したという。『淮南子』には『簠簋抄』のように黄帝の話は無く、三足の鳥についても記されていない。

日本では、十二世紀初めごろ成立の説話集『注好選』上「養由(射日、第六十九)に類話が見え、十の日が昇り、養由がその内九つを落としたとする。養由は春秋時代、楚の人物で、羿と同じく弓の名手とされる。『注好選』後に成立したとされる『今昔物語集』(巻十・十六)にも『注好選』と同じく、養由が九つの日を射落とす話が収められている。また、十三世紀成立の『唐鏡』(第二)では羿の話とされているものの、やはり黄帝や鳥の話は見られない。

一方、共に十六世紀成立の法華経注釈書の『法華経鷲林拾葉鈔』(巻第三・六)及び『法華経直談鈔』(巻第二本・三十一)(以下、『鷲林拾葉鈔』、『直談鈔』)ではそれぞれ次のように記されている。

『鷲林拾葉鈔』

一、日ノ中ニ有三足ノ鳥。昔ニ三皇ノ中ノ黄帝ノ代ニ、日七ツ出テ同時ニ照事有レ之。成レテ政析ヲ落見レニ、三足ノ鳥有リ。又、唐堯ノ代ニ日九ツ出テ、照事有レ之。八ハ可ニ反化ノ日ニ云テ能キ弓射者ヲ召テ、是ヲ被ニ射落。又、日輪ノ中ニ有レ鳥見リ。(傍線、句読点は引用者による。以下同じ)

『直談鈔』

日中^ニ在三足ノ鳥^ノ事。昔於^ニ大唐^ニ、三皇ノ中ノ黄帝ノ代^ニ、日七出^テ同時^ニ照事有^ル。成^レシテ政ヲ、彼日ヲ祈落^テ見^ル、三足ノ鳥有^ル。又、五帝ノ中ノ唐堯ノ代^ニ、日九^ツ出^テ照事有^ル。八^ハ反化ノ日可^レ成^テ云^テ、羿^ニ云^テ能^ク弓ヲ射者ヲ召^テ、是^レ被^テ射落^ル。又、日輪中^ニ鳥有^リ見^テ夫^ヲ始^メ知^ル也。

両書とも、黄帝についての記述があり、また、落とした太陽の中に三足の鳥がいたことが記されている。堯の時の射手についても、『鶯林拾葉鈔』では名を記さないが、『直談鈔』では羿としており、『簠簋抄』の記述と一致する。昇った日の数に関しては、『簠簋抄』は黄帝の時が七、堯の時が六と減っているのに対し、『鶯林拾葉鈔』や『直談鈔』では九つに増えており、差がある。

このように全くの同文ではないものの、『淮南子』や『注好選』等と比較すると、『簠簋抄』の金鳥説話が、『直談鈔』や『鶯林拾葉鈔』といった直談系法華經注釈書の記事に近いことがわかる。『簠簋抄』には金鳥の記事以外にも、『直談鈔』や『鶯林拾葉鈔』と類似する説話が多数含まれている。渡辺守邦は、『簠簋抄』の「四衆」及び、「八龍」（共に上冊二十五ウ）の記事が、『直談鈔』や『鶯林拾葉鈔』と同文的に一致し、「三宝吉日」（中冊）の十七項目の内十一項目の記事が、『直談鈔』と関連性が見られることを挙げ、『簠簋抄』と直談系法華經注釈書との親和性の高さを指摘している。⁽¹⁶⁾

先に示したとおり、『簠簋抄』の説話的文章の多くは「三宝

吉日」に関するものである。よって『簠簋抄』に含まれる説話の量的な中心を占めるのは、『直談鈔』のような直談系法華經注釈書から影響を受けたものであると言うことができるだろう。

三、蛇毒鬼——陰陽道の神にまつわる説話

次に、『簠簋内伝』序文の「蛇毒鬼神」への注をとりあげ、『簠簋抄』には陰陽道の神に関わる独特な説話も収められていることを見ていく。

『簠簋内伝』序文は、牛頭天王の縁起であり、牛頭天王の妻問いの旅と、鬼王・巨旦大王との争いが描かれている。牛頭天王は、長い旅の末に、沙竭羅龍王の龍宮にたどり着き、龍王の三女・頗梨采女を娶る。天王は頗梨采女との間に八人の王子を儲け、二十一年間の龍宮滞在の後、雉鷄と名付けた船で妻子と共に帰還する。この八王子の、八番目の王子が蛇毒鬼神だという。『簠簋抄』では、蛇毒鬼神が、他の七王子が生まれた際に血逆の池に捨てられた胞衣と月水が集まって生まれた存在であるとし、牛頭天王に子息であることを認めさせようとする話が記されている。

蛇毒鬼（上冊二十五丁オモテ）

蛇毒鬼ト者、龍宮ニテ七人ノ王子ヲ生シ給時、衣那ト月水ヲ血逆ノ池ヘ捨給^フ。彼^レガ集テ蛇毒鬼神ト成給。而ルニ七王子ヲ召ツレテ閻浮ニ帰給時、海上ニテ舟不^レ動ニ依^テ珍^シ財ヲ海底ニ沈トモ、其^ノ驗無^シ。其ノ七王子ノ裳ヲ切テ沈給

時、第三ノ王子ヲ直ニ海中ニ入レ給フ時、彼ノ蛇毒鬼、大陰神ヲ戴キ上テ蛇毒カ曰、「我モ是ノ王子タリ。何ソ捨テ給フ乎」天王曰ク「我子ニアズ」ト有。重テ蛇毒ガ曰ク「血逆ノ池ニ捨給フ衣那ト月水ト集リテ我ト成也」ト云、「サテハ其ノシルシヲ見ン」トテ頗梨女乳水ヲシボリ出給時、七人ノ王子ト同ク蛇毒ノ口ニモ入。其時蛇毒モ王子タリト有テ舟ニ乗セテ帰朝有リト云。

牛頭天王が妻と七王子を連れて閻浮提に帰る途中、海上で船が動かなくなる。船に積んだ宝や、七王子の裳裾を切つて海に沈めても効果がなく、三番目の王子である大陰神を海に沈めたところ、大陰神を戴いて蛇毒鬼神が現れる。自分も牛頭天王の王子であることを訴える蛇毒鬼神だが、牛頭天王はこれを認めない。蛇毒鬼神は、七王子の胞衣と月水から生まれたという出自を語る。天王の妻の頗梨采女は、子かどうか確かめるために、乳汁を絞り出す。頗梨采女の乳汁は、他の王子と同様、蛇毒鬼神の口に入り、蛇毒鬼神は王子であると認められ、共に帰国した。『簠簋内伝』序文にはこの場面は無く、『神道集』（巻第三・十二「祇園大明神事」）や、御伽草子「牛頭天王縁起」といった他の牛頭天王縁起にも見られない。

ただ、奥三河に伝わる「牛頭天王島渡り」祭文には『簠簋抄』と共通する場面が記されている。この祭文では、蛇毒鬼神は、初め「頭には松紅葉を引き植ゑたるごとくなる赤き毒蛇」として牛頭天王夫妻や七王子の前に現れるが、母乳を与えられ、母

から本地を現すことを求められると、「一尺四寸の十一面観音」として波の上に姿を現したという。⁽¹⁸⁾

『簠簋内伝』において、蛇毒鬼神は、方位神として説明されている。『簠簋内伝』巻一では、天道神を始めたとした方位神による吉凶や禁忌が説かれているが、これらの神は牛頭天王やその眷属、あるいは牛頭天王と敵対する巨旦大王のことであるという。牛頭天王は天道神と同体で、天道神の方位は全てにおいて良い方位だという（「天道神方」）。そして、八王子は八将神とそれぞれ同体であり、蛇毒鬼神は豹尾神だとされ、その本地は三宝大荒神と説明される。豹尾神の方位に大小便をするのは凶であり、六畜を収めてはならないという（「八将神方」）。

『簠簋抄』「八将神方」（上冊三十ウ）の項でも、次のように注釈され、豹尾神並びに蛇毒鬼神が不浄に関わる神であることが説かれている。

第八、豹尾神者、三宝荒神也故ニ大小便ニ凶ム。又、牛馬鶏犬羊猪六畜ヲ不レ収也。不浄ヲ凶ミ給故也。蛇毒鬼神ハ袍衣ト月水等ノ不浄集テ豹尾ト成給故ニ凶也。（後略）

このように、蛇毒鬼神は『簠簋内伝』及び『簠簋抄』では八王子や八将神の一柱として位置づけられている。一方で、蛇毒鬼神が八王子の中でも異質な存在であったことをうかがわせる資料も見受けられる。

『小朝熊社神鏡沙汰文』には、延久二年（一〇七〇）十月十四日夜に祇園社感神院が焼亡したことが記されている。この

時、八王子の像も焼失し、この内三王子については翌年六月に造進の宣旨が下るが、蛇毒鬼神は、陰陽博士の占いや、感神院での祈請が行われるなどして慎重に判断されており、年内には造立が決まらなかった。翌年三月に、祈請を行った権少都公範の夢の中に二度、異なる姿で蛇毒鬼神が現れる。一度目は金箔を押しした赤衣をまとった巨軀の姿で、頭には冠を着け、髪は左右に分かれ、白杖を持ち、従者として童子を一人具していたという。二度目は姿が異なり、紺青色の忿怒形だった。この出来事の後、この年の五月によく造立の宣旨が下ったという。

また、『神道集』^{②⑨}「祇園大明神事」には、蛇毒鬼神の本地が弥勒菩薩である旨の記述があるが、八王子の中にはその名が見えず、代わりに「宅相神天王」が加わっている。続く巻第三・十三「赤山大明神事」では、牛頭天王が十種の変身を有し、その四つ目を「蛇毒鬼神王」だとする。また、十番目は「疫病神王」なる神であり、「此十種ノ身ハ皆是一體ニシテ、衆生ヲ利益」という。このことから、上野奈々子は、蛇毒鬼神が牛頭天王などと並び扱われる疫病の神であったことが考えられるとしている^{②⑩}。他にも、山本ひろ子が伊勢の牛頭天王・八王子祭文や山田の八王子祭文で蛇毒鬼神が他の王子とは別に扱われていることを指摘している^{②⑪}。

このように、蛇毒鬼神は他の八王子とは一線を画す存在として、あるいは八王子の枠を外れ、疫病を司る神として牛頭天王と同一視される程の存在として畏れられていたと考えられる。

『簠簋抄』の蛇毒鬼神説話も、蛇毒鬼神の異質さが現れていると言えるだろう。他の王子には特に注が付されていないことから、蛇毒鬼神が特別視されていたことがうかがえる。

また、母乳で血のつながりを判別するという話は仏伝などに見出すことができる。切利天に転生した摩耶夫人が、「もし我が子であれば、この乳汁が口に入るだろう」と言い、乳房を絞ったところ、乳汁は遠くの釈迦の口に入ったという説話は『摩訶摩耶経』（巻上、大正十二・三八三a）をはじめとして『経律異相』（巻七、大正五三・三三三a）、『釈迦譜』（巻二・十六、大正五〇・五四b）に見え、日本では『今昔物語集』（巻第二・二二）、安居院流の唱導書『言泉集』、『三国伝記』（巻第二・第四）、『金玉要集』（巻第三・四）、御伽草子『釈迦の本地』にも収録されている^{②⑫}。さらに、その他の仏教説話にも見られる^{②⑬}。

このように、『簠簋抄』の蛇毒鬼神説話は、陰陽道関係の神に関わる独特なものだが、その構成要素には、仏伝などに広く用いられたモチーフが取り込まれていることがわかる。

四、魚養―説話の吸収と変容

前節までで見たとおり、『簠簋抄』には、中世に広く流布していた説話やモチーフが取り込まれているが、その中には『簠簋内伝』注釈に合わせた変更が加えられたと考えられるものもある。

次に見る記事は、『簠簋内伝』巻頭に撰者として記された

〔同前〕天文安部博士吉備清明朝臣撰」の、「吉備后胤」への注である。

吉備とは吉備真備のことである。本来、安倍晴明と吉備真備に血縁関係は無いが、陰陽道の祖として伝説化の進んでいた吉備真備の子孫と位置づけ、晴明、引いては『簠簋内伝』を權威付ける意図なのだろう。また、『簠簋抄』(由来)では、唐から「金烏玉兔集」を招来し、晴明に手渡したのが真備とされている。吉備后胤(上冊十八丁オモテ)

吉備后胤ト者、吉備大臣此書ヲ日本へ渡サル、ハ末世ノタメト云意也。又云、吉備在唐ノ内ニ唐女ニ嫁テ一子ヲ生シトモ、子ハ三界ノ枷ケヒカセト海中ニ捨テ、吉備帰朝ノ后、跡ヲ追テ三年三月日ニ日域へ亀負来ル故ニ、魚養ト名付テ能翰也。聖武ノ姁キヤキ光明皇后此ノ手ヲ習給フ。弘法ハ皇后ノ御手ヲ習給ト云。

真備は入唐した際、現地の人との間に子を儲けたが、「子は三界の首枷」として、息子を海に捨てて帰朝する。息子は真備の跡を追い、亀に負われて三年三月かけて日本まで来たので、魚養と名付けられた。魚養には筆の才があり、光明皇后は魚養から筆を学び、弘法大師は光明皇后の筆を学んだという。

この話の類話は、『宇治拾遺物語』(第一七八「魚養事」)に見える。話の展開は『簠簋抄』とほぼ同じだが、吉備真備の名は無く、父は単に「遣唐使」とされる。また、魚養を海へ投げ入れたのは、母である。他にも亀ではなく大きな魚に乗って日本に渡っていたり、光明皇后や空海に関する記述が無い。

この魚養は、平安初期の書家である朝野(忍海原)魚養のこととされる。『続日本紀』(27)延暦六年(七八七)五月二十二日条に、六位上から五位下に叙された旨が見える。同七年二月には播磨大掾に任ぜられ、同年七月には典薬頭を兼官している。また、同十年正月八日には、居住地の名である朝野姓を名乗ることを許されている。文和元(一二三二)年成立の尊円親王「入木抄」によると、扁額題書に用いられた初めての能書家が魚養であり、大和薬師寺の額は魚養の手によるものだという。

この朝野魚養が真備の息子であったという可能性はまず無いだろう。おそらく『宇治拾遺物語』の魚養説話における興味の主眼は、「魚養」という名の由来を、魚に助けられて海を渡ってきたことに求める点にあり、父が遣唐使という設定も、魚養に大海を渡る理由を与えるためのものであり、特定の人物である必要はなかった。それがいつしか吉備真備に置き換えられた。この変化がいつ頃起こったのかを明らかにするのは難しいが、考える材料はいくつかある。まず、康正元(一四五三)年頃成立の『南都七大寺巡礼記』(菅家本諸寺縁起集³⁰)「元興寺 南大門」の記事に同じ話が見えるが、『宇治拾遺物語』と同じく、父の名は記されていない。また、元和九年(一二二三)成立の安楽庵策伝『醒睡笑』(巻之一)に見える話も、『宇治拾遺物語』と同様である。³¹

他方で、『簠簋袖裡伝』には、『簠簋抄』と同様に、魚養の父を真備とする記述が見られる。『簠簋袖裡伝』は、『簠簋抄』と

同じく『簠簋内伝』の仮名抄である。阪本龍門文庫に室町末期頃とされる写本が所蔵されるが、他に伝本は知られていない。⁽³²⁾

この『簠簋袖裡伝』には、次のようにある。

又、吉備在唐久キ故ニ、妻^ニ愛^ニ唐女^一、子ヲ一人持ケルカ、敵朝ノ砌、子ハ三界ノ枷也トテ、海中ニ抛^テ之、飯朝ス。而、彼子吉備カ船ノ跡ヲ追テ、凌^ニ波^一三年三月ト云ニ日域ヘ泳着ク。吉備カ乗タル船方トモ見^レ之。一間四方ノ亀カ、負^ニ彼子^一来也。魚助ルカ故ニ、彼子ヲ名^ニ魚養^一。彼魚養、天下無双ノ能筆也。然間聖武天王ノ姪光明皇宮女ニ、彼魚養カ手ヲ習給也。又、弘法大師ハ魚養ガ手ハ巨^レ似トテ、光明皇宮ノ習^ニ御手^一給ト云々。(六十丁オモテ五行目)

父親が真備であることを始め、魚養を捨てたのが父親であること、亀に乗って日本に来たとされること、光明皇后や空海が魚養の手を学んだことなど、『簠簋抄』と『簠簋袖裡伝』の記事がほぼ同じ事がわかる。

以上から、魚養の説話は、中世末まで『宇治拾遺物語』に載る形が伝わっていたが、『簠簋内伝』の注釈では、吉備真備の所伝の一部となっていることがわかる。『簠簋袖裡伝』や『簠簋抄』に吸収された段階で、真備の話に変化した可能性もあるだろう。

ただし、大幅に時代が下るが、安政三年(一八五六)刊の、橘行精『本朝能書伝』の「魚養」の項にも、魚養の説話が見える。

朝野宿欄魚養は忍海原連首磨の末なり。或は吉備大臣入唐して彼の国にてうませたる子にて、其母たよりせざりしをうらみて海になげ入てけるが、魚にたすけられて渡り来りしかば魚養となづけけるともいへり。字をよく書ければ七大寺の額ども書せ給ふ、これわが国能書を用る給ふはじめなり。薬師寺の額は一筆に書るよし申伝ふ。大師はこの魚養に筆法をまなび給へりといへり。

魚養を海に投げ込むのが母親で、魚に助けられて日本に渡る点は『宇治拾遺物語』等と同じだが、『簠簋抄』や『簠簋袖裡伝』と同じく魚養の父を真備とし、弘法大師が魚養の筆法を学んだとしてもしている。『宇治拾遺物語』と『簠簋抄』を折衷しような内容である。橘行精が、両書の説を折衷した可能性もあるが、魚養の父を真備とする説は、室町末以降、『簠簋内伝』注釈以外にも広まっていたのかもしれない。

ちなみに、『簠簋抄』や『簠簋袖裡伝』の記事では「子は三界の首枷」という言葉が使われているが、これは中世に用いられた諺のようで、謡曲「天鼓」や「水無瀬」、幸若舞曲「鎌田」、御伽草子の「わかくさ」に用例が見える。⁽³⁴⁾こちらは『簠簋内伝』注釈の意図とは関係無く、同時代の言い回しが取り込まれたのだろう。

このように、『簠簋抄』に取り入れられた既存の説話は、時に『簠簋内伝』注釈に沿う形で、時に中世の知識を反映させる形で独特の変化が見られるのである。

五、宇布絹の鎧―説話の取り込みと位置づけ

『簠簋抄』下冊末尾には「五帝龍王^{タ、カヒ}戰之事」と題された記事があり、盤古大王の子息である五帝龍王間の争いが記されている。「五帝龍王^{タ、カヒ}戰之事」の項目自体は『簠簋内伝』には見えないが、盤古大王や五帝龍王は、巻第二冒頭で言及されている。天地の区別が無かつた混沌の世界を開闢したのが盤古大王で、その五人の子息である五帝龍王は四季を支配し、五帝龍王の子息たちが十干や十二支などであるという。

『簠簋抄』「五帝龍王^{タ、カヒ}戰之事」では、所領を与えられなかつた末妹の黄帝黄龍王が、兄の四王子を相手に起こした戦について記されている。互いの眷属を巻き込んだ戦は熾烈を極め、惨状を見かねた帝釈天が文選博士を遣わして占わせる。文選博士の占いにより、四人の兄からそれぞれ十八日が、四季の土用として黄帝黄龍王に分け与えられ、加えて三年に一度の閏月も黄帝黄龍王が治めることとなり、和睦が成立した。また、この時、黄帝黄龍王から文選博士に四土用から三日ずつが贈られ、これが閏日となったという。⁽³⁶⁾

この記事には、黄帝黄龍王には、盤古大王から五つの宝物が与えられたと記される。「八尺ノ懸帶花形」、「五尺ノ髪」、「八花形ノ唐ノ鏡」、「眉間赤ノ劍」、そして「初生衣ノ鎧」である（なお、これらの宝物が与えられたことは、一部の伝本のみだが、『簠簋内伝』巻二の「七箇善日」にも見える）。「初生衣ノ鎧」はお

そらく「ウブギヌノヨロイ」と読むのだろう。「宇浮絹ノ鎧」ともいい、「百歳ノ人着^キテモ、或ハ二三歳ノ人着^キテモ似合鎧」であるという。

そして、「五帝龍王^{タ、カヒ}戰之事」に続く記事では、この宇浮（布）絹ノ鎧の三国相伝が語られている。

宇浮絹ノ鎧（下冊二十一丁ウラ）

一、宇布絹ト者、天竺^{カシタ}テ漢馱^{カシタ}ト云者盗人也。天竺^{カシタ}ヲ追^ヲレテ大唐^{カシタ}ヘ来ル。又、大唐^{カシタ}ヲ追^ヲレテ日本^{カシタ}ヘ来ル。女^メヲ一人具シテ来ル。其レ美女也。彼ノ女^メヲ八幡太郎ニ進スルニ依テ、ムコ引出物ニ宇布絹ヲ八幡太郎ヘ奉ル。而シテ平氏出張シテ源氏ヲ滅ス時ニ、平氏彼ノ胃^{カシタ}ヲ取テ重宝トシテ清盛持^レス之。清盛ノ女メ二位ノ尼、八十代高倉院ノ妃ト成リ給時、源氏出張シテ平氏ヲ押詰^ヲル時、二位ノ尼、八十一代安德ヲ具シテ鎮西^{チン}ヘ逃^ニゲ給時、三種ノ神祇ヲ取テ逃ル。シンシヲハ尼持^レ之、宝劍ヲハ王子持給、内侍処ヲバメノトノ女房持^レ之、源氏ノ兵ノ押詰時、尼ト王子ハ左右無ク海ニ入、女房ノ入海ノ時、裳^{モウ}ヲ船ニ射付テ見ルニ、内侍処見ヘタリ。依テ海底ヲ尋見ルニ、シンシ計有リ。宝劍ト鎧^ニ之依テ、日本ニ失タリ。彼ノ太子出雲国ヒノ川上ノ大蛇ニ成、村雲ノ劍モ三種ノ内ノ宝劍也。彼ノ大蛇太子安德ト成テ取タルヲ、素戔嗚^{ササナミ}ノ尊大蛇ヲ退治シ取還^ヲ給^ト云。

天竺・大唐を追われ、日本に逃げた盗人・漢馱は、娘を八幡太郎（源義家）に嫁がせる。この際に婿引出物として献上した

のが宇布絹の鎧である。こうして源氏が手に入れた宇布絹の鎧だが、その後、平清盛の手に渡る。しかし平家が滅亡に追い込まれ、安徳天皇入水の時、宝剣と共に宇布絹の鎧は日本から失われたという。黄帝黄龍王、引いては盤古大王の鎧が、盗人の手を経て源平家を転々とするという、なんとも突拍子も無い話である。

安徳天皇が八岐大蛇の化身であり、宝剣を取り返して海底に帰ったという説は『平家物語』諸本に見え、『簠簋抄』もこうした言説が元になっていると思われるが、『簠簋抄』の書き方では剣を取り返した大蛇を、更にその後で素戔嗚が退治して剣を取り返しているように読める。

さて、右の話は、管見の限り他書に類話を見出すことができないが、産衣（ウブギヌ）と呼ばれる鎧のことは、軍記物語などに記されている。半井本『保元物語』上巻「新院、為義ヲ召サル事」では、「月数」や「日数」を始めとした源氏相伝の八両の鎧の内の一つとして「元太ガウブギヌ」が挙げられる。また、金刀比羅本『平治物語』上巻「源氏勢汰への事」では、「元太が産衣」の表記で頼朝が着用した鎧として描かれる。太刀の髭切とともに、代々嫡男が受け継ぐ「ことに秘蔵」の武器であり、本来であれば悪源太（義平）に譲られるはずだったが、「末代大将」と見られた頼朝に贈られたという。『平治物語』には、名の由来も記されている。この鎧は、八幡殿（義家）が二歳のとき、院から参内するよう命じられたときに着けた鎧であり、

義家の幼名が元太であったため、元太が産衣と呼ばれるのだという。

このように源氏重用の鎧だったが、源氏敗走の際には、他の鎧とともに雪の中に脱ぎ捨てられる。（中巻「義朝奥波賀に落ち着く事」）

また、名の由来について、『義経記』⁴⁰（巻第一「吉次が奥州物語」）では少し違った説を載せる。義家の父・頼義は、安倍貞任討伐を命じられるも手を焼き、十三歳になる息子・源太を代わりに大将とした。急ぎ八幡宮で元服の儀が行われ、源太は義家を名乗るようになるが、この時に下賜された鎧が「源太の産衣」なのだという。この他にも産衣の名は、『源平盛衰記』（巻第十六）、『異制庭訓往来』、『運歩色葉集』や舞曲「伊吹」にも見え、中世において、源氏重代の鎧として、広く知られていたことが窺える。⁴¹

『平治物語』と『義経記』とは異なる由来譚を採用しているが、「産衣」の名の通り、幼年期の義家が着けた鎧と言う点では共通しており、『簠簋抄』の「二三歳ノ人着テモ似合鎧」という説明とも通じるように思える。

また、「元太が産衣」は、京都大学国史研究所蔵『保元物語』や、『義経記』の異本である、天理大学図書館蔵本『義経双紙』では「くわんたかうふきぬ」、舞曲「伊吹」では「かんだが産衣」とも記される。『簠簋抄』に現れる盗人・漢駄（カンダ）とは、「カンダガウブギヌ」という音から後付けされたのではないだろうか。

残念ながら、これ以上この考えを裏付ける材料は無いが、いずれにせよ、『簠簋抄』では、盤古大王の宝物である宇布絹の鎧が源氏や平氏の重宝であり、三種の神器の一つである叢雲の剣とも同等の価値を持つかのように語られている。宇布絹の鎧の価値を、ひいては盤古大王の威光を、源平の武具や、叢雲の剣で担保しているとも言えるだろう。ここには、『簠簋内伝』編纂において、編者を清明に仮託し、また、清明を真備の後胤と位置づけたのと同じ原理が働いているようにも思える。自説の展開にあたり、既に評価が確立した存在と多少無理があつても結びつけることで、その価値を保証しようとするのが、『簠簋内伝』や『簠簋抄』の編纂態度だと言えようか。

結語

以上、四つの記事を通して、『簠簋抄』(本篇)の說話を見てきた。『簠簋抄』には、中世末までに流布していた多彩な說話や知識が取り込まれている。取り込み方は様々で、『金鳥』のように、『直談鈔』等の直談系法華經注釈書からほぼ引き写しされたような記事がある一方で、『魚養』のように、『簠簋内伝』注釈に沿う形で変更され、中世の断片的な知識や言い回しが加えられるという場合もある。

また、既存の說話が多い一方で、『蛇毒鬼神』のような陰陽道の神々に関する話や、『宇布絹の鎧』のような『簠簋抄』独自の說話も収録されている。その中で、同時代の說話のモチー

フや知識を取り入れることもあるが、その場合も『簠簋内伝』注釈に沿う形で手が増えられ、本来は無関係だった話題とも結びつけられて、独特の展開をとげている。

本稿では、中世末までに類話や関係記事が見られる說話を検討したが、『簠簋抄』には、近世以降に展開が見られる說話(十二支寅「件(くだん)」等)や、現時点で出自が全く不明な記事(帰亡亡亡之事「石碎と鉄破の相撲」等)も含まれている。より広い観点からの検討が必要であるが、このことは中世から近世の過渡期に成立した『簠簋抄』の、說話集としての幅の広さを示していると言えるだろう。

注

(1) 『簠簋』、『簠簋内伝金鳥玉兎集』、『金鳥玉兎集』、『簠簋袖裡伝』などとも。『簠簋内伝』諸本及び校訂は中村璋八『日本陰陽道書の研究 増補版』(汲古書院、二〇〇〇年) 参照。

(2) 渡辺守邦『簠簋抄』以前「狐の子安倍の童子の物語」(『国文学研究資料館紀要』一四号、一九八八年三月)

(3) 「清明伝承の成立『簠簋抄』の「由来」の章を中心に」(『国語と国文学』六一巻二号、一九八四年二月)、『簠簋抄』の諸本(『実践女子大学文学部紀要』三五号、一九九三年三月)、『簠簋抄』の諸本・補遺(『前同三六号、一九九四年三月)、『簠簋抄』以前・補注(『説話と説話文学の会「近世の説話 説話論集 第四集」、一九九五年)、『簠簋抄』を修訂する(『実践国文学』九八号、

二〇二〇年一月)

- (4) 小池淳一「昔話のあらわれかた」「絵姿女房」「海老と大鳥」に
関する中世資料」「津軽の民話」第九号、一九九四年一月、徳
田和夫「絵画と唱導芸能 和泉式部の熊野詣で説話をめぐって」(天
野文雄編『芸能伝承の世界』講座日本の伝承文学第六卷、三弥井
書店、一九九九年)、増尾伸一郎「〈文選博士〉考」(小峯和明編『漢
文文化圏の説話世界』、竹林舎、二〇一〇年)、小池淳一「龍王た
ちの行方 陰陽道「神話」の唱道性」(林雅彦・小池淳一編『唱導
文化の比較研究』、岩田書院、二〇一一年)、渡瀬淳子「韓憑故事
の受容と変容」(室町の知的基盤と言説形成 仮名本『曾我物語』
とその周辺、勉誠出版、二〇一六年)、榎村寛之「件(くだん)」
の成立 近世の古代的言説「近世的神話」の中で」(東アジア怪異
学会編『怪異学の地平』、臨川書店、二〇一八年)
- (5) 深沢徹「日本古典偽書叢刊 第三卷」(現代思潮新社、二〇〇四
年) 所収
- (6) 本稿では彦根城博物館琴堂文庫蔵本を使用。龍谷大学なども
所蔵があり、東北大学デジタルコレクション (<https://www.irepository.net/jl/meta/pub/G0000388tulle> 二〇二一年八月
三十一日確認) で公開。
- (7) 渡辺「『簠簋抄』の諸本」(3) 前掲
- (8) 写本の存在は不明。慶長十七年頃写とされるものが昭和四七年
一月三越デパート開催の反町弘文荘蒐集古典籍逸品稀書展示即売
会の目録などに見えるものの、実物は確認されていない。
- (9) 『簠簋内伝』では、釈迦の成道正覚の日と説明するが、『簠簋抄』
では、熊野詣での熊野詣で中に月の障りに見舞われた女房と熊野
権現との歌の交換が記されている。
- (10) 『淮南子 上』(新釈漢文大系五四、明治書院、一九七九年)
- (11) 『三宝絵 注好選』(新日本古典文学大系三一、岩波書店、
一九九七年)
- (12) 『今昔物語集 二』(新日本古典文学大系三四、岩波書店、
一九九九年)
- (13) 『唐鏡』(古典文庫二二七、古典文庫、一九六五年)
- (14) 『法華経鸞林拾葉鈔』(臨川書店、一九九一年)
- (15) 『法華経直談鈔』(臨川書店、一九七四年)
- (16) 渡辺(2) 前掲
- (17) 続群書類従本では「蛇毒神天王」、「簠簋抄」では「蛇毒鬼」、「蛇
毒鬼神」と表記。
- (18) 山本ひろ子「異神」(平凡社、一九九八年) 五一―九頁
- (19) 村山修一「日本陰陽道史総説」(塙書房、一九八一年) 三四―三頁、
上野奈々子「神道集」における「蛇毒鬼神」について」(『論輯』
三八号、駒澤大学大学院国文学会、二〇一〇年五月)
- (20) 『神道集』(神道大系 文学編一、神道大系編纂会、一九八八年)
- (21) 上野(19) 前掲
- (22) 山本(18) 前掲、五二―四頁
- (23) 小峯和明「『釈迦の本地』と仏伝の世界」(小林保治監修『中世
文学の回廊』、勉誠出版、二〇〇八年)、同「イメーজの回廊7

摩耶とマリアの授乳」〔図書〕七六一号、岩波書店、二〇一二年七月)

- (24) 般沙羅王の后と卵から生まれた五百人の息子の話(『俱舍論記』(巻八、大正四一・一五五b)や『今昔物語集』(巻第五・六)、蓮華夫人、鹿女夫人の話(『六度集經』(巻三・二三、大正三・一四a)、『雜寶藏經』(巻一・八、大正四・四五二c)(八、四五二b(九))、『大唐西域記』(巻七、大正五一・九〇八c)、『神道集』(巻第六・三十三「三嶋之大明神之事」)など。小峯(23)前掲、趙ウネ「民間伝承における「鹿女夫人」説話の展開」(小峯和明監修『宗教文芸の言説と環境』(シリーズ)日本文学の展望を拓く三、笠間書院、二〇一七年)。

- (25) 小峯和明「遣唐使と外国神話『古備大臣入唐絵巻』を読む」(シリーズ(本と日本史)②、集英社、二〇一八年)

- (26) 『宇治拾遺物語 古本説話集』(新日本古典文学大系四二、岩波書店、一九九〇年)

- (27) 小林保治・増古和子校注『宇治拾遺物語』(新編日本古典文学全集五〇、小学館、一九九六年) 頭注など

- (28) 『続日本紀』(新訂増補国史大系二、国史大系刊行会、一九三五年)

- (29) 『古代中世藝術論』(日本思想大系二三、岩波書店、一九七三年)

- (30) 藤田経世編『校刊美術史料 寺院篇 上巻』(中央公論美術出版、一九七二年)

- (31) 『醒睡笑』と『宇治拾遺物語』の書承関係については、岡雅彦「醒睡笑と宇治拾遺物語」(『玉藻』第五号、一九六九年七月)に詳しい。

- (32) 阪本龍門文庫善本電子画像集 (<http://mahorobalib.nara-wu.ac.jp/v05/> 二〇一一年八月三十一日確認) の公開。

- (33) 『入木道三部集 附・本朝能書伝』(岩波文庫七七九、岩波書店、一九三一年)

- (34) 宮川光司「熊野観心十界曼荼羅とそのルーツ」(V)「子は三界の首枷」考」(『相山女学園大学研究論集(人文科学篇)』四〇号、二〇〇九年三月)

- (35) 『篋篋内伝』では「盤牛王」、『篋篋抄』では「盤牛」。

- (36) 『注好選』(第八六「文選は争を止めき」)や、『続教訓抄』(巻第八「五行王相死因老事」)、『体源抄』(巻第十二「王相死因老ノ事」)、『八帖花伝書』(巻第二第七五条)の書にも類話が見える。増尾(4)前掲

- (37) 延慶本注釈の会編『延慶本平家物語全注釈第六本巻十一』(十九霊剣等事)(汲古書院、二〇一八年)

- (38) 『保元物語 平治物語 承久記』(新日本古典文学大系四三、岩波書店、一九九二)

- (39) 『保元物語 平治物語』(日本古典文学大系三一、岩波書店、一九三二年)

- (40) 『義経記』(新編日本古典文学全集六二、小学館、二〇〇〇年)

- (41) 岡見正雄校注『義経記』(日本古典文学大系三七、岩波書店、一九五九年) 補注巻一・二八、鈴木彰『平家物語の展開と中世社会』(汲古書院、二〇〇六年) 第三部第一編注八一

(なかの・えいすけ／本学大学院博士前期課程修了)